研修報告

英語教師　セブ　日々挑戦

幸松　世剛
Seigo KOMATSU

第1章　英語学習　編

今回の英語研修は2本柱で構成されている。1つは「レギュラークラス」。桐原グローバルアカデミーの標準的な英会話プログラムで、全てのレッスンが1対1で行われる。2つ目は、特別に設定していただいた「Effective Oral Communication for Classroom Use」（授業で使用する効果的コミュニケーション方法）というプログラムで、英語を母語としない英語教員の指導力を向上させるトレーニングである。以下がその概要である。

個人的には、自分の英語力や英語指導力の向上が目的であることは間違いないが、それ以上に、フィリピンの英語教育と日本の英語教育の違いを肌で感じ、私自身の課題、ひいては日本の英語教育の課題を見出すことに強く関心を抱いていた。

●講師

1. CRISTIE ANN L. JACA, PhD 2.（クリスティ）

・Doctor of Philosophy in Education (Ph.D.) graduated, University of San Carlos, October 2009

・Dissertation: English Proficiency Levels of Student Teachers in Relation to their Student Teaching Performance

2. Fr. Felino Borgueta Javines Jr., SVD, DM　（ジュン）

・Doctor of Management – Human Resource Management University of San Jose Recoletos, Cebu City, Philippines 2007

・Dissertation: Practices and Problems in Human Resource Management and Level of Performance of Administrators in Selected SVD

●開催時期：2019年8月および2020年3月

●研修の目的と期待される効果

こうまつ　せいごう：英語科教諭・山岳部顧問

「聞く・話す・読む・書く」の4技能を高める言語活動を通じて、受講者に英語による英語教科指導力の向上のための様々な研修の提供を行うことが目的。プログラムに掲げられている主な3つのセッションは、受講者のオーラルコミュニケーション・スキルの向上、そして英語による指導トレーニングの実践により、既に備えている指導アイデアについて、日本での授業において自信をもって正確に提供できることを目指した構成となっている。

●研修の主な内容

1. 受講者の英語の必要性を再確認する。
2. 日本での英語教授法を英語で説明し、課題や目標等を共有する。
3. 授業計画を作成する。
4. 立案した授業計画を実践しその評価やディスカッションを行う。
5. 英会話力の一層の向上を図る。

●セッション

1. Week1（Language Program Level1）：英語による英語授業の体系把握 ：インタビュー、ニーズの確認、4技能の向上、教室英語の確認、英語を使用した授業の立案・関連トレーニングの実践、等。
2. Week2（Language Program Level2）：英語による英語授業実践と評価 ：クラス内での状況設定による多様な取り組み・課題解決、実践の繰り返しによる習熟度向上、実践内容の評価、等。
3. Week3（Immersion Program）：フィールドワーク ：公立・私立／中学・高校等の授業視察、教員・生徒との面会等による校外学習。

「Week1　英語授業の体系把握とTeaching Demonstrationの実践 ― 許すこと・目標設定・ideaをもつこと　の重要性」

7月29日（月）。ホテルの部屋がノックされ、クリスティがやって来た。いよいよプログラムがスタートする。彼女のレッスンに雑談はほぼない。初日のレッスンでも、部屋に入って椅子に腰掛けた直後に本題に突入する。そして話すスピードが速い。相手の英語能力に合わせてスピーキングスピードを調整することは、グローバルコミュニケーションにおいて日常的に行われることだが、彼女にそのような意識は感じられない。彼女が部屋にいる間、彼女が全てをコントロールしている。私についてきなさい。私に言う通りすればあなたの願いは必ず叶う。彼女は、実際そうは言わなかったが、常に自信にみなぎっているように見えた。彼女のスピードについていくことが何より私のリスニングスキル向上につながる。

①Tongue Twisters （英語版早口言葉）

英語教師なら一度は授業でも扱ったことがあるであろう。私の場合は、高校１年生のコミュニケーションの授業で、区別の難しい発音を指導する際に生徒に紹介する。１年に10回程度であろうか。

あくまでも発音指導の材料にすぎない日本の英語教育に対して、クリスティはもっと実践的な捉え方をしているようだ。

Tongue twisters are a great way to participate and improve pronunciation and fluency. They can also help improve accents by using alliteration, which is the repetition of one sound. They're not just for kids, but are also used by actors, politicians, and public speakers who want to sound clear when speaking.

いきなり38種類のtongue twisters を行うように言われる。そのうち知っているのは10ほどである。クリスティはただ黙って聞いている。後述するが、基本的に彼女は生徒（この時の場合は私）の間違いをその場で正すようなことは一切しない。日本の英語教育に持ち込むなら、以下のように行うと効果が期待できるであろう。所要時間は3～4分である。

【Tongue Twisters】

1. リストを配る。授業の最初に行うことが望ましい。
2. 生徒にリストの中から1つ選ばせる。前回とは違うものを選ぶように指示する。
3. 後に発表があることを伝えた後に、1分間の練習時間を設ける。
4. 数名の生徒に発表させる。

②具体的目標設定

クリスティは立て続けに以下のような質問をしてきた。

1. What are your expectations in this training?
2. How do you see yourself after the training?
3. What do you want to be included in the training?
4. What specific English language area/skills do you want to improve more?

正直言うと回答に困ってまごついてしまった。英語が出てこないのではなく、考えそのものが私になかったのである。“I just want to improve my English.”と回答できる雰囲気ではなく、それらしいことを言ってその場をしのいだ。なぜ目標設定が大切かをパワーポイントで、セブの歴史についての授業をコンパクトにデモンストレーションして教えてくれた。まず、「KWL Chart」と呼ばれるものの2つの項目に答える。私は以下のように答えた。

What I Know	*Traffic is heavy / good bananas / large gap between rich and poor / 4 golf courses in Cebu*
What I Want to Know	*good restaurants / golf courses / educational system about English*

※ イタリック体は私のメモをそのまま記載

その後に、パワーポイントのスライドでセブの歴史を学ぶ。その後に以下の項目に回答する。

What I Learned	*consists of many islands and islets / Lapulapu was a fighter to protest Mactan island / Santo Nino church is the oldest church in Philippines*

「すでに知っていること」、「知りたいこと」、「学んだこと」が書き込まれ、これで「KWL Chart」が完成となる。学習終了後に見返すと、そのbefore/afterが分かりやすい。特に重要だと思われるのは、そのトピックについて「知りたいこと」を明確にすることである。授業に入る前に、そのトピックについて何を知りたいのかを考えさせることで、能動的態度を促すことが可能になるからである。

生徒自身の長期・短期的目標を、生徒自身で明確にさせ、意識させるというやり方は、日本ではあまり一般的でないように思われる。「偏差値を上げる」、「大学入試を突破する」、「4技能のスキルを上げる」、これではあまりに抽象的で雲を掴むようなものである。大切なのは、長期的な視点で言うならば、英語をどの分野でどのレベルまで操れるようなりたいか、短期的な視点で言うならば、この授業で自分は何を学びたいか、という具体的な目標設定である。クリスティの言葉を2つ紹介する。

It is important to set your goal if you want to improve your English.

Once you learn how to reach your goal, you can continue to improve yourself.

そもそも英語を勉強するのはなぜであろう？大学入試突破のみを目指し、模試や過去問が解けるようになることが英語を学ぶということだと思っているようでは、本当の意味で英語を習得することは難しいであろう。いや、そう思わせているのなら、我々英語教師や英語教育の在り方そのものに責任があると考えるべきであろう。ならば、我々英語教師は、生徒の英語学習の動機づけを、「大学入試のため」とか「資格試験のため」などという言葉で語るのではなく、クリスティが述べているように、生徒自身に、どのように英語と長期・短期的に向かい合っていくつもりなのかを、しっかりと時間を割いて考えさせることは、非常に重要なことであると思われる。クリスティの考えは、非常にシンプルで理解することはたやすい。「灯台下暗し」ではないが、我々英語教員は、「本物の英語を教えたい」、「大学入試をクリアさせたい」、などとあれもこれも試行錯誤する中で、まずは具体的な目標を設定させる、という教育実習生でも知っていそうな教育の基本的の「き」を、見失ってしまっているのではと思わされた。

③生徒の間違いを許すことの重要性－自分の考え・意見をもつことが最も大切

英語授業内で日本人生徒に英語で発話させる際、最も留意しなくてはならないことは何であろうか。クリスティによると、最も大切なのは、自分の考えを持たせることである。頭の中が空っぽのno ideasの状態で、コミュニケーションは生まれない。さらに、自分の考えを持てると、それを英語で表現してみたいという欲求も自然と生まれてくる。クリスティの過去の授業の実例を見ても、動画教材を多用し、生徒に考えさせ、そこから授業を展開している。 彼女はこの段階を“the most important step”と表現していた。

彼女がとても独特で、個人的には大いに見習いたいことの1つは、生徒の間違いをとことん認めることである。トレーニング中も、私の発話（ライティングも）に対して間違いを指摘することは一切しない。

It is important for teachers to allow students to make mistakes.

特にコミュニケーションレベルでの間違いは、全く気にしていないと思う程、寛容な態度である。ここまで徹底的に許容されると、生徒側は必然的に、自分の言ったことが伝わったという自信を持つことができる。自信はさらなる学習につながり、次はミスなくやれるようになるかもしれない。

確かに、大学入試が最終ゴールと考える教育現場では、このやり方は批判を受けるかもしれない。しかし、個々の長期的な英語との関わり方という視点に立つならば、クリスティのこの大胆な方法は、特に、英語の基礎を学ぼうとしている者のスキルアップには、非常に有益なものであると思われる。

④文法を能動的に学ばせる大胆な取り組み ― To be grammaticalとは

学校で設定されている英語の授業は、2つに大別できる。1つはコミュニケーションやリーディングを主に行うもの、もう1つが文法やライティングを扱うものである。私の場合、前者では、グループワークを多用しコミュニケーション活動を積極的に取り入れるが、後者ではそれほどでもない。やっても授業の最後や、単元の最後に少し時間を割く程度である。国内で最先端とされる英語の授業を、研修などで見学しても、それらはたいてい前者の授業で、いかにアクティビティを行えば効果的かに主眼が置かれているように思う。私がここで言いたいのは、文法指導においては、これだけ英語教育が急速に変化している中でも、「文法は文法でしょ」という安易な発想のもとで、旧態の指導方法が現在でも継続して行われているのではないかということである。クリスティの考えを聞いて、私自身も自分の授業の在り方を再考せねばならないと思わされた。

文法指導に関するキーワードはgrammaticalという単語で、彼女はそれを強調する。この単語は普通、grammatical errorsとかgrammatical mistakesなど、「文法的な、文法上の」という意味で使い、そのあとには名詞を伴う。彼女はto make students be grammaticalという使い方で、自身の考え方を語る。私に示してくれた実例はこうだ。

1. 学校中にある掲示物・案内板等で、文法的におかしいと思われるものを探させる。
2. グループでどこに文法上のミスがあるのか話し合う。
3. どうしたら文法的に正しいものになるのか検討し、発表する。

To be grammaticalとは、文法を教え込むことではなく、文法について常に意識して学習できる態度を身に付けさせることである。日本の一般的な考え方や取り組みと大きく異なる点は、文法指導においても、教員が半ば一方的に指導するよりも、生徒自らが能動的に文法について考える習慣を付けた方が、文法を理解する近道になると考えている点である。文法指導における、「教え込む」から「自ら気づかせる」への転換、換言するなら文法指導のコペルニクス的転回が、日本人の英語力向上に風穴を開けるかもしれない。

⑤英語教師が知っておくべきlanguageとcommunicationの違い

正直言って、今回のセッションで最も難解だったのがこのテーマである。私は比較的多くの研修会にこれまで参加してきた方だと思っているが、このテーマについて語られるのを聞いたことはない。恥を承知で、私がクリスティにした最初の回答をいくつかそのまま紹介する。

languageとは

・We use languages as a means of communication.
・We can get information through languages.
・Language is the best tool to communicate with each other.

communicationとは

・Communication is to covey one's feeling to each other.
・We can communicate with each other not only by words but also by gestures and facial expressions.

以上の回答からも分かる通り、私は、「communicationの手段としてlanguageがある。」が模範解答であると考えていた。私の回答は、的外れではなかったようだが、英語を教える者として以下のことを覚えておくように教わった。

クリスティはlanguageを“a group of symbols”という表現で定義する。symbolは象徴、“a group of symbols”は「象徴の集合体」ということになる。

次に、「象徴の集合体」であるlanguageの学習にはどのようなものが含まれるのかを考える。彼女は以下の3つを挙げる。

・knowledge of language（Competence）―基本的な技能や知識
・knowledge of language acquired（Acquisition）―どのように習得されるかに関する知識
・knowledge of language use（Performance）―どう生成するかに関する知識

ここで、日本の英語教育の現状をじっくりと考えてみることにする。大学入試に必要な

力はほぼCompetenceのみと言って良い。模試の偏差値が高く、TOEICも高得点を取れるのに、全く話せないという、日本人によくあるパターンの人はCompetenceに関しては高い能力を持っていると言って良い。すなわち日本の英語教育はCompetenceを指導するノウハウやシステムはできあがっていると言って良いであろう。Performanceに関しては、センター試験に変わる共通テストでのリスニングの高配点化、英検などの外部試験の大学入試への導入など、ここ数年で一気にその重要性が認識され、スピーキングやリスニングなどは学校現場では教える必要がないと思っている英語教師は、かなりまれな存在であろう。英語研修というと、この分野に関する実践報告がほとんどである。Acquisitionに関してはどうだろうか。どうやったら英語が身につくのか自信を持って答えることができるであろうか。また、生徒に自信を持って指導することができるであろうか。当然、ここで言う英語が身につくというのは、偏差値70をとることでもないし、1年でこの単語帳を、文法はこの参考書を、長文は1日1題やろう、みたいなことを言っているのでもない。私は正直言うと、この領域に関して自信がない。勉強不足だっただけかもしれないが、体系的に学んだことがほとんどなく、ただ断片的に、経験的に、いくつかのことを理解しているだけだ。極論になるかもしれないが、日本の英語教育に足りないものはこの領域に関する理解と実践なのではないだろうか。極端な例を挙げるなら、小学生に初めて英語を教える時、“This is a pen.”を教えるべきなのか、英語の歌を一緒に歌うべきなのかという類の問題である。小学校から大学、それぞれの段階で、どんな内容を教えるかは十分に議論されていると思う。しかし、各段階で、どのような態度をどんな方法で養っていったら、本当の意味で英語が身につくのか、という議論と実践は、まだまだ不十分であるように思う。批判されることを承知で言うならば、例えば、小学生の学習初期段階では、文法指導は一切せず、動画等を多用し、楽しみながら英語と触れ合い、英語に対して前向きで能動的な態度を養うなどといった、各段階でどのように英語と（英語学習と）と向き合っていけば、効率良くゴール（当然第1志望合格ではない）に向かっていけるかという、揺るがない柱が必要なのではないかと強く感じる。これこそ、フィリピンの英語教育にあって日本の英語教育にないものの1つであることに間違いないであろう。

communicationについて学ぶ上で重要なのは、まず“dynamic”（動的な、活動的な）であることを理解することだと言う。communicationが成される時、我々は、その状況に応じて瞬間的な判断を行い、即座になんらかの意思表示をすることが求められる。こちらがどう反応するかで相手の反応も変化し、予想できない展開になることもあり得る。クリスティの解説を聞いていて、何度も繰り返される“decode”という単語が印象的だった。日本の英語教育ではあまり聞かれない単語である。“decode”とは「暗号を解く」という意味だ。私なりに解釈するならば、dynamicな会話においては、言語としては完璧とは言えない状況が頻繁に起こる。例えば、文法の誤り、省略、発音の間違いや癖などである。その時に大切なのが“decode”する（暗号を解く）力であるというのだ。つまり、その場の状

況、文法的知識のバックグラウンド、時には相手の表情や身振りから、相手の言おうとするメッセージを「読み取る」力である。確かに、この力を付けさせることは容易なことではない。しかし、communicationに必要なものはこういうものだという知識は、communicationを指導する側に、大いに役立つものだと確信する。

⑥Teaching Demonstrationの実践

8月2日（金）。予定通り、模擬授業を行うこととなった。前日の夜に、レッスンプランを考えたが、留意した点は以下の2点である。まず第1に、クリスティの考え方に沿うよう、動画を見せたり、アクティビティを盛り込んだり、生徒に考えさせ、アウトプットする機会を設けること。こちらに関しては、日本でもほぼ毎回やっていることなので、それ程心配していなかった。2番目が私にとっては重要であった。正直言って、私はこの模擬授業のスタイルが苦手なのである。多くの場合、英語の教師が生徒役を演じるので、私の話す内容を、生徒役の先生方は、実際にはほとんど全てを理解しているのである。その状況は、何も知らない生徒と対峙することと、あまりにもかけ離れていて、どうしても照れてしまう。「あなたは生徒役、私は先生役」という設定に入り込むことは私にとってとても難しいことなのである。そこで今回は、模擬授業とはいえ、生徒役を演じるクリスティ、ジュン、そして見学にくる桐原グローバルアカデミーの先生、3人に、演技ではなく、本音で語ってもらうような仕掛けを考えた。そう、ある意味、Native3人、しかもいずれも英語教師との真剣勝負なのだ。

簡単ではあるが、私が事前に作成したLesson Planをそのまま紹介する。

Topic	:	The World of Miyazawa Kenji
Time Frame	:	30 minutes
Objectives	:	Within the session, students should be able to: 1. learn what Miyazawa Kenji wanted to express in his works 2. learn what is a good relation between humans and nature
Lesson Presentation		
Motivation	−	The teacher shows a video about a poem by Miyazawa Kenji, and asks students what impressions they have about the poem.
Presentation &Discussion	−	The teacher reads a short story in class. “The world of Miyazawa Kenji” The teacher asks what Kenji was like?
Activity	−	The teacher shows some pictures and asks the two questions below. 1. Why do so many people climb mountains? 2. What is a good relation between humans and nature?

私の部屋には私を含めて4人。私は先生役なので1人立っている。3人は、本当は私の先生だが、生徒役なので座っている。もう開き直ってやるしかない。「日本人で知っている人はいますか。」という問いに「安倍晋三」「錦織圭」の名前が挙がる。「それではこの日本人はどんな人だと思いますか。あとで聞きます。」と言って、事前に仕込んでおいた宮沢賢治の「雨に

も負けず」の英語朗読を聴かせる。意外な展開に3人は驚いている。「季節に敏感な人ね。」「とても信心深い人ではなかろうか。」などと、生徒役であることを忘れて本気で答えてくる。順調なスタートを切った。

数年前に使ったことのある教材を再編集し、パワーポイントのスライドを使いながら、一気に読む。読解や文法説明などは一切しない。20世紀初期にも関わらず、21世紀の課題とも言える、人類と自然の共存をテーマにした作品を多く残したことなどを要約して、最も重要な次のステップに進む。

1枚の写真を見せ「これはどこで、何をしているところでしょう。」と質問する。「ディズニーランドではなさそうね。」「日本人に大切な、なにか特別なお祭りの写真ではないか。」本気で考えている様子が伺える。私が見せたのは、単なる高尾山の山頂の写真だった。模擬授業であることを忘れて、なぜこんなにも人がいるのか、富士山とどう違うのか、などと質問がとんでくる。あらかじめ想定していたので、大概の質問には回答できた。次に2枚の写真を見せるので共通点を探してほしいと言って、仕込んでおいた2枚の写真を見せる。1枚は群馬の赤城山で、1枚は秩父の金峰山で私が撮ったものだ。「分かった。このframeのようなものだ。」その通り。2枚とも山頂に鳥居があるのだ。神道について簡潔に紹介し、日本人にとっては、山や河は、そのものが神のような存在なのだ。そういう考え方が日本の伝統の1つなのだということを説明する。もう1度、人で混雑する高尾山の写真を見せながら、「なぜこんなにまで多くの人が、山に登ろうとするのか考えて欲しい。」と言う。「人は根本的に自然と繋がっていたい存在なのではないか。」「都会の生活では、生きている実感を得られないからではないか。」などの意見が出される。「いよいよ最後の質問。人と自然はどうやって共存していくべきでしょうか。」と問う。「セイゴ。その意味で、セブに来てどんなことに気づいた。」と逆に質問される。「交通渋滞のせいで空気はあまり良くないですね。東京と似ています。正直言って、セブはゴミが街中に散らかっていて、東京より汚く感じます。」などと回答すると、現在、フィリピンでは国をあげてゴミ問題に取り組んでいるのだと言う。町に大型のスーパーマーケットができ、マクドナルドやコンビニができ、生活が便利になる一方で、街中にゴミが増えていった。フィリピンでは、プラスティック問題（ゴミ袋やペットボトル）が最大の社会問題であるとのこと。私も、数週間前に日本で見た、2100年には東京の最高気温が42度になるニュースのことなどを紹介し、人と自然との共存について語り合い、最後は授業なのか雑談なのか分からなくなってしまい、授業を終了させた。

授業の反省会をすぐに行う。よほど期待されていなかったのか、褒めて伸ばそうと思っているのか、日本のように「あの発音間違ったでしょ。」とか「あの説明が分かりにくかった。」などと、挙げ足をとるような批判はしない。私自身で感じたことは、当然やりとりが100%英語になるので、瞬間的にどうしても言いたいことが言えないことがあり、自分の英語力の無さが不甲斐なくて仕方がなかった。例えば、生徒の意見を自分なりに理解して、別の表現で再生してみようと試みるがそれができないのである。より良い授業にするためにクリスティにアドバ

イスされたことの1つ目は、生徒の褒め方。“That's right.”や“Perfect.”だけでなく、いろいろな表現を使ってみると良いと言う。2つ目は、授業の冒頭に行った詩の朗読と、宮澤賢治の説明の順番を逆にした方が、詩の深い理解につながっただろうとのこと。そしてその反省を生かして、すぐに2度目のデモンストレーションを行った。

私の手元に、この時クリスティが書いた評価シートがある。今回のデモンストレーションのよくできた部分と、今後の課題を端的に表わしているのでそのまま掲載する。

“You have the ability to teach students perfectly, however you can still improve your art of questioning.”

（生徒を指導する力を持っていることは間違いありません。しかしまだまだ、質問する術を向上させられることでしょう。）

「英語教師をも悩ますリスニングの罠 ― Linking（リンキング）」

ここでは、桐原グローバルアカデミーの通常レッスンでの私の失敗を１つ紹介したい。以下の2つの英文を比較してほしい。

She wants some ice cream.

She wants as an ice cream.

ディクテーション（書き取り）をするように指示され、かなり速い速度で実際に読まれたものが上段で、私が書き取ったものが下段のものである。こうして文字にしてみると、私のミスがあまりにもおろかで、英語の先生やってて大丈夫かという声が聞こえてきそうである。がしかしである。何度か繰り返してもらっても、下線を引いた部分が「ウォンサナイス」に聞こえる。いや、聞こえるではなく、実際そう発音している。英語を苦手にしている人のために、一応仕組みを説明するとこうなる。

She wants some ice cream.

wantsのtが発音されず、sはsomeと同じ音のため、結びついて（Linkingし）「ウォンサム」となる。someのmとiceのiが結びつき、「サナ（マ）イス」となる。かくして「ウォンサナイス」の完成である。奇妙な書き方になってしまうが、こうなる。

She ウォンサナイス cream.

音だけでもっとも近いと考えて書いた答えは、She wants as an ice cream. であったが、私は、これが間違った答えであると分かっていた。なぜなら、見てわかる通り、この英文は意味をなさないからである。それでは、正しく聴き、書き取るためには、何が必要なのであろうか。先生に聞いてみた。以下の例を見てほしい。

They're kids.

their kids

There are kids.

正確にゆっくりと発音した場合、下線部の発音はそれぞれ違う。しかし、日常会話の中でこ

れらが発音された場合、全てほぼ同じ音で発音される。先生自身もそれを認めている。私はこれらを間違って聞き取ることはないのか質問してみたが、100％間違うことはないと言う。決め手となるのは、その音が発音された状況と、前後の文法構造であるそうだ。つまり、ネイティブであっても、上記の3つを例にあげるなら、まず「ゼアkids」という音を聞いた瞬間に、その状況と前後の文法から、「ゼア」の正体がther'reなのかtheirなのかthere areなのかを一瞬で判断していると言うのだ。このレベルに到達するには、果たして何度の経験が必要なのだろうか。簡単であるはずがない。

ここでは、私の失敗を述べたが、同じような理由で、リスニングを苦手にしている日本人は少なくないのではないかと思う。中学1年生でも知っている、よく使われる基本的な単語が、それぞれがLinkingされて発音することによって、とてつもなく厄介な存在になるということを忘れてはいけない。

「Week2　TeachingとはTeaching Planの立て方 ― VisualizingやMentorとは」

8月13日（火）。トレーニング再開である。いきなり、その週の金曜日に再び模擬授業をやってもらうと告げられる。私がこんなことを言うのはおこがましいが、クリスティは英語トレーナーとして、本当のプロフェッショナルであると感じる。彼女は折に触れて、私が英語教師としてどうなりたいのかを質問してくる。私はいつも、「授業をより良いものにしたい。そのために何か新しいものを発見し、実践できるようになりたい。」という感じで答えていた。研修会などに参加して「何かつかんだぞ。」「いいアイデアもらったぞ。」と思うことは少なくないが、実際に実践できるようになるかは、また別の問題である。彼女はもう一歩踏み込もうとするトレーナーである。理解させようではなく、実践できるように変えてやろうとする熱意がこちらに伝わってくる。

①日本になくフィリピンにある英語教育の柱 ― Visualizing

第2言語として英語を学ぶフィリピンと、外国語として英語を学ぶ日本では、そもそも前提が異なる。しかし、悔しいが英語教育に関しては、我々はフィリピンの英語教育から多くのことを学ばねばならないだろう。最も驚いたのは、日本でいう英語4技能は、フィリピンでは5技能であるということだ。クリスティ独自の考え方ではない。何十ページにも及ぶ、フィリピンの英語教育シラバスの中にもしっかりと明記されている。

日本の英語4技能とは当然、以下の4つだ。

1. Listening　2. Speaking　3. Reading　4. Writing

フィリピンの英語5技能とは、こうだ。

1. Listening　2. Speaking　3. Reading　4. Writing　5. Visualizing

具体的にVisualizingについて解説する。まず、見たもの、聞いたもの、読んだものを

絵に描いたり、表にしたりすることで、言語情報を視覚化する。これが第1段階で、自分が得た情報を、整理したり分析したりすることが狙いである。第2段階は、書いたり、話したりする際に、絵や写真、スライド等を見せる。当然、情報伝達が効率的に行われるようにすることが狙いだ。

後述するが、フィリピンの英語教育は時代の流れと歩調を合わせた、非常に実践的なものである。現代では、日本でいうとラインのようなアプリケーションを使い、相手とコミュニケーションをとることが多くなり、ビジネスにおいても、多くのコミュニケーションがオンラインで行われるようになった。特にビジネスにおいては、即座に相手の意図を理解し、こちらの意図が明確に伝わるように返答をすることを求められることが少なくない。Visualizingのスキルとは、そんな時代でコミュニケーションを成功させる、強力な武器と言えるのではないだろうか。

日本でのVisualizingの現状について考えてみる。この言葉は多くの場合、「ICT教育」の中で語られ、典型的な例は、タブレットを使って学んだことをプレゼンさせるなどであろう。しかし、実際に実践しているのは、SGH（スーパーグローバルハイスクール）のようなごく一部の学校や、相当に意識の高い先生が行う少数の授業に限定されるであろう。私が特に興味深いと思ったのは、第1の段階である。学んだものを整理し分析するためのVisualizingは、日本ではあまり認知されていないように思われる。この段階で英語教師がやることは、それほど難しいことではない。例えば、生徒には難しいと思われる動画をこれから見せようとする場合なら、聞き取れた単語をすべて書き出させる。相反する意見が述べられた評論が題材なら、それぞれの意見の違いを、表にしてまとめさせる。詩についての授業なら、気づいたことを箇条書きさせる、など極めてシンプルである。なんだそんなことかと思うかもしれないが、このことの重要性を理解し、授業で実践できているかどうか、そして実際に生徒の力がついているかどうかが、フィリピンと日本の大きな違いであろう。

②21世紀に求められる英語教員の力とは

今の時代が今までと違うところをまとめる。

1. インターネットを通じて、どんな時でも、どんな場所でも、情報を得ることができる。
2. スピード社会の中で、たくさんのことを同時に処理しなくてはならない。
3. 現代の若者は、上記の環境下で育っていて、1つのことに集中することが難しい。

クリスティは、そんな時代の中で求められる英語教員の力として以下を挙げる。「教師は変わらなくてはならない。」という表現を用いていた。

1. よきMentor（助言する人）であること。「教える」ではなく「導く」ことのできる力。

2. 生徒の学習に対する態度を変えられる力。
3. 生徒の好奇心を満足させられる力。
4. 生徒の不可能を可能に変えられる力。
5. コンピュータやアプリケーションを適切に利用する力。

21世紀型の英語指導という意味において、授業内でパワーポイント等を使い、動画をどんどんと見せられる能力やその環境設定は、最も重要で最初に取り組まなければならないことであろう。これなしに彼女の言う21世紀型英語教員を目指すことはまず不可能だと思われる。私は2013年に授業用のプロジェクターを個人購入し、それを約7年間使用している。実体験として、授業にPCやプロジェクターを持ち込むことの有益性を知っている。そもそもこのフィリピンでも、多くの学校を訪れたことのあるオーストラリアでも、教科に関わらず、すでに大多数の先生がスクリーンを使って授業を行っていて、正直言って日本の黒板授業は、世界的視野に立つとかなり時代遅れなのではないだろうか。ちなみに、かつてオーストラリアから来た大ベテランの先生は、本校の黒板を見て、「東京にはまだ恐竜でもいるのか。」というジョークを言っていた。

特に動画の使い方に関しては、フィリピンの全員がこうだとは思わないが、クリスティのやり方はとにかく大胆である。私とのトレーニング中もプロジェクターとPCはつなぎっぱなしで、パワポから動画へ、動画からパワポへと、縦横無尽にテンポよく展開していく。時にはニュース、時には歌、時には彼女の家族のたわいもない動画。PCの使い方が非常にダイナミックである。例えば、私が2011年の東日本大震災の話を持ち出した時、即座にグーグルで検索し、スクリーンに映し出し、そこから話し合いが始まる。ある時は、互いの価値観の話になり、彼女自身の生き方を私に説明しようとして、TEDTALKの動画を見せる。彼女は、計画通りの動画だけでなく、理解の手助けになると判断すると、その場の状況に応じて選んだ動画を次々と見せてくる。目の前で、トレーニングは想像できない展開になるが、クリスティは落ち着いている。私は彼女自身のトレーニングから、身をもって、21世紀型授業の在り方を教わったのだ。

彼女が毎回の授業で何度も繰り返す「Mentor（助言する人）」という単語は、今回の研修全体のキーワードになる単語である。生徒が、それぞれのゴールにどうしたら近づけるのかを助言できる先生こそ、これからの時代に求められる先生であると言う。目標がない人には、興味を喚起し目標を見つけさせる。常に生徒の関心を満足させるようにアクティビティを多用する。従来の英語教育の中では、助言をすると言っても、「長文が弱いからあの問題集やっておけ」的な、受験に向けた助言になってしまっている。ここで言う助言とは英語学習、英語習得、英語との関わり方に関する、もっとスケールの大きいものである。日本の英語教育には、受験という独特のファクターがあり、フィリピンの英語教育を無防備にそのまま受け入れることは危険であろう。しかし、日本的な「教え込む」英語教育に限界を感じている人も少なくないことも事実であろう。我々英語教員も時代に合わ

せ、教師としての存在意義や役割を変えていかなくてはならないのかもしれない。

③Teaching Planの作成と改善

2回目のLesson Planを考えるにあたって、私はクリスティに1つの提案をした。それは、私が帰国してすぐに使えるような現実的なものにしたいということだった。つまり、模擬授業とはいえ、テキストは日本で使っている受験対策のものにして、ほとんど受験のことしか頭にない日本の高校3年生を対象にしたいと申し出たのだ。私はここに、フィリピンの英語の先生と勝負するために来た訳でもないし、今までやったことのない授業をやって1人でガッツポーズをするために来た訳でもない。日本の生徒に、大学受験を目指す生徒に、今までより良い授業ができるようになるために来たのだ。クリスティはざっとテキストに目を通し、学校で使っているテキストが、すでに大学入試問題であるとは思っていなかったようで、驚いた様子だった。私が作成した、修正する前のLesson Planを紹介する。

Topic	:	Japan Cool Biz
Time Frame	:	30 minutes
Objectives	:	Within the session, students should be able to: 1. learn how to choose correct answers in exams. 2. express their own ideas about “Cool Biz.” 3. learn how to use the expression “I want you to know …”.
Lesson Presentation		
Motivation	−	1. The teacher shows a picture and asks a question about clothing. 2. The teacher shows a video about “Japan Cool Biz” and asks what they notice in the video
Exercise	−	The teacher gives students 10 minutes to perform the exercises.
Explanations	−	The teacher checks students’ answers and gives some advice to choose correct answers.
Presentation &Discussion	−	The teacher asks whose idea you agree and the reason.
Activity	−	The teacher lets students talk about them or their country by using the expression “I want you to know …”.

日本の「クールビズ」を話題にした入試問題で、議論もしやすいテーマを選んだ。パワーポイントで、絵や動画を見せ興味を喚起する。授業中盤は問題演習と解説を行い、最後は英語を使ったアウトプット活動が2つ。私が3年生のコミュニケーション英語の授業で行う流れをそのまま持ち込む。日本語を一切介さない点を除けば、アウトラインは私にとってそれほど特別なことではない。

授業を改善するために、クリスティに指摘された1点目は私の目標設定の甘さだ。私のLesson Planの目的には、「生徒に～をlearnさせる。」「生徒に～をexpressさせる。」とあるが、目標設定として“learn”や“express”は抽象的で、その結果、授業のポイントがぼやけてしまうというのだ。もっと具体的な動詞を使って目標を明確化すべきとのこと。かく

して目標を以下のように修正した。

1. learn how to choose correct answers in exams.

→ *find* the correct answers very specific.

2. express their own ideas about “Cool Biz.”

→ *summarize* 3 key ideas on “Cool Biz.”

3. learn how to use the expression “I want you to know …”.

→ *identify* the uses of the expression “I want you to know …”.

特に3番目が分かりやすいが、learnさせるのではなくidentify（特定のものを認識する）させることを目標にした方が、どんなことをやれば良いのか具体的にイメージしやすくなる。

指摘の2つ目は、前述したVisualizingに関係することである。ここで扱う内容は、「クールビズ」に対して3人がそれぞれの意見を述べる形式になっているのだが、その違いを絵や表でまとめさせようとのこと。さらに「クールビズ」の目的の1つである電力節約に関して、各自の意見を聞いてみると、話題がより個人的なものになるだろうとのこと。かくして私は、最後のパートをこのように修正し、イタリック部分を追加した。

Discussion − *The teacher asks to write down key words about each opinion.*
The teacher asks whose idea you agree and the reason.

Presentation − *The teacher asks to list down what they do at home or in school to save energy.*

④Teaching Demonstrationの実践（2回目）

今回の模擬授業で心がけたことは2つ。少しでも良い授業を見せつけてやろうと背伸びをしないこと。私は模擬授業が苦手で、生徒役の先生をどうしても意識して張り切りすぎてしまう。特別なことをすると模擬授業本来の意味が無くなる。そして、生徒に対して適切に指示を与え、柔軟に授業をコントロールすることである。

前日に1日がかりでLesson Planを綿密に打ち合わせていたこともあり、前回よりもかなり落ちついて授業をすることができた。前回の反省を生かして、こちらからの発問パターンも予め書き出して準備していたことも良い結果につながった。また、普段は日本語で解説する入試問題解説の部分でも、パワーポイントのスライドを工夫することによって、英語でもできるという手ごたえを感じることができた。

私は最後のアクティビティで、まず、本文中に出てきた“I want you to know …”という表現を生徒に示し、これが自己紹介や国について紹介するのに便利なものだと説明し、実際にいくつかの例を挙げた。次に生徒に時間を与え発表してもらった。日本人高校生にとっても無理のないレベルであろうし、最後は自己表現で授業を終えるのは悪い終わり方ではない。しかしクリスティは、私のこの終わらせ方が気に入らなかったらしい。最後の

アクティビティだけ、今回のトピックとは無関係なのはなぜなのか、最後まで一貫性を維持すべきだったと主張する。例えば、今回だったらこの授業内で学んだことを、この表現を使って話させた方が良かったのではないかとアドバイスされた。私にとってこの活動に関しては、トピックから切り離された補足的な活動であり、本校の生徒ならこれくらいしかできないだろうと、生徒の能力を言い訳にして、やや妥協があった。見事に看破されてしまった。

「総括　今回の研修で得たものとこれから」

私は、自分自身は比較的現実的で合理的な考え方をする人間だと思っている。英語教育に関しても、受験勉強が日本人の英語力向上の弊害になっているとは思っていないし、今回学んだ、フィリピンの英語教育やクリスティのやり方を、無防備に受け入れるべきだとは思っていない。しかし、今回の留学中でも、数名の現地の先生方から日本の英語教育に対する批判を聞いたし、留学中の日本人からも、日本の英語教育が変わらなければ、いつまでたっても日本人は英語を話せるようにはならないだろうと面と向かって言われた。

私を含めた日本人英語教師は、その批判に対してどう答えるべきであろうか。クリスティの印象的だった言葉を紹介する。

Teachers should shape students' future.

（先生の仕事は、生徒の未来を形成すること。）

Teachers should change their attitude of teaching in 21st century.

（21世紀、先生は自らの教える態度を変えていかねばならない。）

その批判に対して、日本で受験は避けられないからとか、日本の伝統だからなどと言って責任転嫁するのはあまりにも無責任であろう。やはり英語教員1人1人が自分自身の問題として、責任を負うべきであろう。総括になるかどうか分からないが、この問題に関して、一個人の英語教師に、どんなことができるかたくさんのことを教えられた。目標設定の重要性や、Mentor（助言を与える人）としての教員の在り方、21世紀に求められる教員のスキルや、Lesson Planの立て方などだ。私が言うのもおこがましいが、究極的には、日本の英語教育を変えるのは我々現場の英語教員以外いないであろう。我々の考え方が変われば、日本の英語教育は良い方向に向かっていくはずだ。私は日本の英語教育に少しでも貢献できる存在でありたい。また、この無理難題を克服しようと挑戦し続けることは、人生においてとてもスリリングで、やりがいのあることだと信じている。

第2章　異文化交流　編

「ベガーの襲来　セブの闇」

8月4日（日）。Mactan Island Golf Clubでプレーを終え、私の乗るタクシーは、休日ゆえにひどい渋滞もなく（セブ島には電車はない。平日はGWの東名高速道なみの渋滞となる）マクタン島からマーセロ・フェルナン橋を渡り、Mandaue地区を抜け、順調に滞在先のホテルへ向かっていた。とある交差点で車が停車していると、1人の10歳くらいの女の子が、車と車の間を歩き回り、なにやら激しく車の窓を叩いている。今度はこっちに向かってきた。私の座る後部座席の窓をドンドンと激しく叩き、人指し指を立てて何か叫んでいる。私はようやく、彼女がベガー（beggar:物乞い）だと気づいた。「1ペソくれ」とでも言っているのか。私は首を横に振り、手でバイバイをして拒否する態度を見せると、彼女は不満そうな表情を浮かべながら、次の車へと向かっていった。人生初の出来事にあっけにとられていると次の瞬間、逆側の窓を叩く少年ベガーが。今度は完全に無視した。

世界中にベガーはいる。セブのベガー達は文字通りのbeggarで、begとは「お金を乞う」という意味だ。今回のようにタクシーに乗っている最中にまでbegされたのは初めてであったが、ベガーには10分ほど外を歩くと必ず出会うことができる。私の滞在先のホテルから、Ayalaショッピングモールまで買い物に出かける際には、いつも必ず2、3人の少年ベガーが、もらったお金を入れる紙コップを抱えて座っている。ある少年は何かの病気なのか、眼球が大きくとび出している。ある時は土砂降りの雨でも傘もささずにそこにいた。こちらの先生から教わったことだが、貧困層の親の中には、子供を学校に入れられず、子供を強制的にベガーにさせることで少しでも家計の足しにしようしている者もいるらしい。70～80年代に貧しい農村地帯からマニラやセブといった都市部へ多くの人が移住し、都市のスラム街は拡大。より良い仕事を求めてきたはずが、ますます経済格差が広がる結果に。

年間9万人以上の観光客が訪れるセブ。ダイビングやスパを楽しもうとする者にとってはハワイと比較してもそれほど見劣りしないほど魅力的であるし、欧米の半額ほどで同質の英語留学ができることも、この地を、特に日本人や韓国人にとって魅力的なものにしている。話は戻るが、セブの魅力があまりに明確であるがゆえになおさら、ベガーやストリートチルドレンの存在は、明るいリゾートとは対照的で、強烈に印象的で、自分は異国にいるのだということを肌で感じさせてくれる。どの国にも光と闇がある。しかしセブ（フィリピン）ほど、そのコントラストが強い都市を私は知らない。セブは世界中から観光客を集める魅力と、早急に解決しなくてはならないと思わせる根本的な社会問題が分かりやすく共存している。

不謹慎だと思われるかもしれないが、自分の息子達にも、彼ら自身の目でセブのベガーをいつか見させたいと思っている。授業や本から学ぶより、何倍ものことをその経験から学ぶことができると確信している。

「突撃インタビュー　桐原グローバルアカデミーの先生にずばり聞いてみた」

毎日顔を合わせる先生方とも随分と打ち解けてきた。聞けば何でも本音で答えてくれそうな関係になっていると確信し、授業の時間内にいくつかの質問をしてみた。6人の先生方の言葉から、真実が見えてくるように思う。また、先生方の微妙な言い回しの違いも興味深い。“Today, before you start your class, I have some questions for you.”（今日は授業を始める前に僕から質問させてください。）と言って切り出した。迷惑な生徒ですみません。

①フィリピンで最も有名な日本人は誰ですか。

圧倒的に安倍晋三。フィリピンでは、外交上手で日本を導く優秀なリーダーという印象を持っている人が多いようだ。次点はテニスの錦織圭。フィリピン人なら誰でも知っている。日本でも、テニスキッズには憧れの存在であるものの、もっと評価されていい日本人かもしれない。ミュージシャンの宇多田ヒカル、ONE OK ROCKも相当人気があるらしい。また、どうやらセブに英語留学経験のある芸能人も多いらしく、自分が英語を教えた大女優の名前を挙げる先生もいた。

②日本にどのような印象を持っていますか。

ほぼ共通して使った単語は“rich”。私もやや誤解していたが、普通のフィリピン人にとって日本は物価が高すぎて、とても旅行などできない場所の1つのようだ。また、多くの日本人がお金持ちであるという印象を持っていることは確かであるようだ。たくさんの日本人と接してきた彼女らの日本人に対する印象は、すごく興味深かった。“reserved”（控えめな）、“soft-hearted”（優しい）、“careful of everything”（慎重な）、“patient”（我慢強い）といった微妙にニュアンスの異なる形容詞を用いる。また意外なことに、半分の先生が、日本人は“independent”（自立した）だと言うのだ。私は一般的に言うならば、日本人はむしろ逆だと思っていたのでこの意見には驚いた。また、フィリピンのインフラ（特に排水溝）向上には日本の技術が大いに貢献しているらしく、その技術力の高さを挙げる人も多かった。

③フィリピンの良い点はどこですか。

判で押したように、ほぼ全員が“hospitable”（もてなしの良い）という単語を使った。そして、生活の中心に“good family”があり、そこには“love”があることが我々の矜持だと言う。フィリピン人はカトリック信者が大多数らしいが、非常に信心深い人が多く、週末の教会には何十人も人が集っているし、先生方の中にも自身の宗教について堂々と語る人がいた。

④フィリピンの悪い点はどこですか。

まず、「だらしない」ことを次のような言葉でそれぞれ表現する。“lazy”（だらしない）、“not punctual”（時間を守らない）、“procrastination”（ぐずぐずと何でも後回しにすること）。また、“crab mentality”（人を蹴落とす意地の悪さ）が嫌で、特に政治家に多いという意見も。「養うお金もないのに子供をたくさん持つ家庭も問題だ」と明言する先生もいた。

⑤今後の目標や夢はなんですか。

少しでも本音を引き出そうと、“A very simple answer is OK like ‘I want to marry a handsome guy.’”（いつかイケメンと結婚したいわ～みたいな答えでもいいですよ。）と前置きする。「セイゴ。お前の夢を先に聞かせてくれ。」と言われ、正直あまり考えたことがなくて困る。「英語教師としてもっと自信を持ちたい。良き父でいたい。そんなものですかね。」などと答える。英語を話す時の方が、日本にいる時より不思議と正直になる。彼女らのキーワードは“successful”（成功した）だ。広義な単語だが、彼女らは「経済的に成功した」という意味で使っている。“rich”や“higher position”という、もっと直接的な表現を使う先生もいた。他の方から聞いた話だが、セブだけでも60以上の語学学校があり、英語の先生はより良い労働条件を求めてキャリアアップしていこうとする人が多いらしい。ちなみに、セブの最低賃金は日給で370ペソ（およそ800円）だと聞いた。

第3章　ゴルフときどき山　編

「Mt.マヌンガル登頂　歴史の教科書に登場する誰もがその名を知る山」

8月3日（土）朝6:30。私はほぼ毎日通っているAyalaモールの向かいにあるバスターミナルで120ペソ（およそ250円）の乗車券を買った。目的地はMt.マヌンガルの登山道入り口。「ついにこの日が来た～。うお～。」と興奮を感じながらバンに乗り込んだ。バンと言っても日本で言うところのトヨタのハイエースみたいな車に、運転手を含めると18人が寿司詰め状態で座る。バンが何時に出発するかを尋ねるのは無意味だ。なぜならバンが満員になった時が出発時間だからだ。日本では乗車定員は厳密に定められていて、5人乗りの車に6人以上の人が乗っている光景はまず見ない。セブでは一言で言うなら何でもありだ。シートベルトは運転手すらしていないし、ベルトが固定されていたり、ロックするパーツが隠されていたりと、したくてもできないのだ。こちらに来て2、3日でもうあきらめることにした。

それはさておき、Mt.マヌンガルである。こちらに来る前からセブの山事情をいろいろ調べていた。1953年3月、当時のフィリピン大統領マグサイサイを乗せた飛行機が、セブ島中部にあるこの山に墜落。生き残った者も数名いたが残念ながら大統領は命を落とす。墜落原因はい

ろいろな説があるが未だにはっきりしていないようだ。ネットなどによると、この墜落事故は歴史の教科書に載っており、フィリピン人なら誰でも知っているが、その山に登ったどころか、どこにあるかも知らないというフィリピン人がほとんどであるらしい。どうやら以前は、共産ゲリラが多く潜伏し、マリファナや大麻の違法栽培が盛んに行われているような、地元民しか立ち入れない山であったようだ。実際に、私の6人の先生方との会話からも、彼女らは山での事故はよく知っていても、その場所については、そこから100kmも離れていない所にあるにも関わらず、ほとんど無知である様子だった。「行くしかない。この山に登らずして帰国するわけにはいかぬ！」セブの住人すらあまり登らない山に登る。しかもその山は歴史の教科書にも出てくるような国にとって重要な場所。天邪鬼な私の心はがっちりと掴まれてしまった。

我々を乗せたバンは山道を日本では考えられないような速さで疾走する。運転手は平日のセブ市内の渋滞のストレスを一気に発散するかのごとくアクセルを踏む。道はガタガタなので、時折お尻が浮いて頭が天井にぶつかる。コーナーの度に隣のおばさんの長髪が私の顔に舞ってくる。まるでジェットコースターだ。ディズニーのビッグサンダーマウンテンよりスリリングだ。恐怖を感じ、ブレーキは大丈夫かな、そもそも18人も乗っていてタイヤは大丈夫なのか、などと本気で考え始めた。7:40、登山道到着。休日ということもあって、バイクタクシーのお兄さんたちが何人も寄ってきて途中までタクシーで行かないかみたいなことを言ってくるが、「No, need!」ときっぱり断る。山をバイクで登るなんて登山じゃないだろ。

前半はひたすら舗装された坂道を登る。日本の山と違うのは、かなり登った場所にも民家があり、水やお菓子を売る店があったり、少年たちがバスケをしていたり、牛や豚がいたりしたことだ。北海道の故郷や丹沢の大倉尾根や御岳山のロックガーデンなどを思い出し、久しぶりに日本のことが恋しくなった。8:50、キャンプサイト到着。開けた場所になっていて前日から来ていたのかテントが2つ立っていた。ここからは現在ガイドなしでは登ることができない。現地のガイドが私と2人のフィリピン人女性を連れて山頂を目指すことに。ここからは様子が一変する。道は急に狭くなり、周囲の木々も高くなり、草や葉が目の前までせり出してくる。まるでジャングルだ～みたいなことを言ったら、女性陣に“But actually in the mountain!”と軽くあしらわれた。途中、飛行機の墜落現場には記念碑とそのエンジンが展示されている。また亡くなったマグサイサイの立派な慰霊碑もある。30分ほど歩くと、急峻な岩場が目の前に現れる。ところどころ、足元はぬかるんでおり、気を抜くと大怪我につながる可能性もある。日本なら鎖やロープで補助されるレベルである。両手で岩をしっかりと掴みながら一歩一歩登っていく。この1年間、山の本を読みあさってきたのでこんな時にどうすべきなのかよく分かっている。9:30、登頂。山頂も岩場になっていて、岩がひとつひとつ尖っているので、腰掛ける場所を探すのはなかなか難しい。

振り返ると、田部井淳子さんの本に影響され、初めて山に登ったのが2018年11月。そこからいろいろな山に登ってきたが、当然それらはすべて国内の山で、今回が初めての海外であ

る。山頂からの景色は絶景そのもので、眼下に雄大な山々が広がる。街や海は見えない。とにかく山の連続である。日本とそれ程変わらないな～、やっぱり海外でも山は結局のところ山なんだな～、などとどうでもいいことを思ったりした。我々が到着した時は他に4名いたが、その後1時間ほどで続々と登山者が到着し、最終的には20名くらいが山頂にいた。日本人は私だけ。韓国人が1人。あとは皆フィリピン人である。山頂ですることも世界共通なのだろうか、インスタ映えを狙って（？）とにかく皆ポーズを決めて写真を撮りまくる。女性陣は滞在の1時間ずっと写真を撮っていた。私はすぐに飽きてしまい、岩場に寝転がったりして、海外初登頂の感動の余韻を満喫していた。

登山道入り口まで歩いて下山し、そこからはバイクタクシーでバンに乗るターミナルまで送ってもらうことにした。バイクでもヘルメットなしである。事故ったら死ぬでしょ。ターミナルまで約20分の道のりをバイクは走る。私は必要以上の力でドライバーに背中から抱きつく。ターミナルのあるBalambanの街に差し掛かると、急にあたりが暗くなってきて、ドライバーが“Rain is coming!”と言ったとたんに大雨が降ってきた。大粒の雨が顔面に当たる。雨季のセブの雨は短時間にまさに滝のように降る。目を開けるのがやっとのレベルである。これって雹なのではと思うほど顔が痛い。ターミナルに到着した時は本当に安心した。これで生きてホテルに帰れると本気で思った。私はレインウェアを着ていたので良かったが、Tシャツ短パンだったドライバーはずぶ濡れのまま帰って行った。14:00、ホテル到着。かくして私の海外初登山は終わった。あ～楽しかった。やっぱ山はいいよね～。

「オスメニアピーク登頂　どんな人も優しく迎え入れるセブ島の最高峰」

セブ留学することを決めて以来、真っ先にやろうと決めていたのが今回の山、オスメニアピーク登頂である。標高1,015mでセブ島最高峰である。第2位が前述したMt.マヌンガルで1,000mだ。ネットで「セブ島　山」と検索すると、たくさんの旅行記を読むことができる。実際に、こちらの先生方も登った経験がある人が多く、彼女らからも十分に情報を得ていたので、安心して計画を立てるこができた。

8月11日（日）。朝4:00起床。朝食のために特別に用意した「チキンラーメンぶっこみ飯」を食べ、ザックを準備する。長い1日の始まりだ。タクシーでSouth Bus Terminalへ向かう。タクシーの運転手に「3,000ペソ（6,500円位）で山まで送ってやる」と言われるが、その手には乗らない。バスターミナルは週末の帰省のためか早朝にも関わらず、人でごった返している。オスメニアピークの入り口となるDalagute行きのバスに乗り込む。Dalaguteはセブシティから南に100kmのところにある町である。鳩バスのような黄色のバスが一気に満員になる。予約とか座席指定とか何時発とか、日本で当たり前のことを望んではいけない。バスに飛び乗った順に好きな席に座っていき、満員になったら発車する。エアコンも効いていて座席スペースも日本のものと比べても遜色ない。目的地は100km先なのに、料金は145ペソ（300円くらい）と驚きの安さである。バスは、遅い車にクラクションをがんがん鳴らし、南へと向かう。

正直言って運転は荒い。左側の車窓にはずっと海が広がり、右側には熱帯雨林独特の高い木々が続いている。町と町の間は道以外に何もない。面白かったのは、バス停に止まる度に、いろいろなものを売る人がバス内に入ってくることだ。東京ドームのビール売りのように、「お菓子50ペソだよ～」みたいなことを言う。サンドイッチや稲荷寿司のようなものを売っている者もいれば、「レイバン～、レイバン～」と言ってサングラスを売ろうとする者もいた。果たして売れるのだろうか。

8:00、Dalaguteに到着。と言ってもターミナルがある訳でもなく、道端に降ろされるような感じ。目の前のセブンイレブンでハンバーガーを買って食べる。次はバイクタクシーに乗って山の麓を目指す。すでにセブ滞在は3週間になっているので、値段交渉にも慣れてきた。5人ほどのドライバーが声をかけてきたので、安全面を考慮して、１番いいバイクのドライバーと交渉する。往復、ヘルメット付き（日本では考えられないが、運転手はおろか客すらヘルメットがないケースが多い）で依頼すると、「400ペソでどうだ。」と言ってくるので「高すぎ。300ペソ（650円くらい）じゃないと乗らない。」と言うとあっさり了解してくれた。オスメニアピークへの登山者は、その多くがこのバイクタクシーを使って、山道を抜け、登山道へ向かう。空は青く、風も気持ちよく、北海道の故郷をバイクでツーリングしているような晴れ晴れした気持ちになった。

約40分バイクに揺られて、登山口到着。目の前には、ネットで何度も見たオスメニアピークが。頂上の岩肌が白く見えている。多分石灰岩だろう。管理事務所で登山料60ペソを支払い、登山者名簿に名前と国籍を記入すると、受付のおばさんに「オハヨウ。」と声をかけられる。「日本語うまいんですね～。」と言うと「これが唯一知っている日本語なのよ～わっはっは。」みたいな感じで返答される。9:00、登山開始。危険な場所は一切ない、緩やかな坂道をゆっくりと登っていく。すぐそこに頂上が見えているので、あ～せっかく来たのだからもう少し登りたいな～などと思う。マヌンガルよりも、登山者が多いせいか、登山道も比較的整備されていて一本道なので迷うことはない。脇には、日本で言うと祭りの屋台のようなお店がいくつかあり、お菓子や飲み物、フルーツに土産品まで売っている。

9:30、登頂。セブ島で最も高い場所に私は立った。山頂からの景色は、山しか見えなかったマヌンガルとは違う。海岸が近いので海がきれいに見える。境目が分かりにくいほど海も空も青い。日本で言うと釧路のような港町が見える。そして周囲には、フィリピンの山独特の、干し草を積み上げたような30mくらいの円錐形をした丘がたくさんある。そよそよと風が吹き抜け、北海道、ルスツの丘で感じるような爽快感を感じる。山頂には20人程の登山客がすでにおり、やはりインスタ映えを狙ってなのか、モデルのようなポーズをして写真を撮っている。登山者の服装も軽装が多く、登山靴を履いている人はほとんどおらず、Tシャツ短パンで、ランニングをするかのような格好の人がほとんどである。

登山道入り口から30分で山頂に立ち、すばらしい景色が見られる。最高峰でありながら、初心者も優しく受け入れてくれるこの寛容性こそ、この山の魅力である。マヌンガルが男性的

な山なら、オスメニアピークはセブ島の優しい母親的な山であるように感じた。下山の際、現地のガイドに支えられながら、ゆっくりと山頂を目指すフィリピン人の老夫婦とすれ違った。オスメニアピークが、2人を優しく歓迎しているように思えたのは、山岳小説の読みすぎだからだろうか。

「ゴルフは世界共通の有益なコミュニケーション手段だと確信した日（冗談です）」

セブと言ったらアイランドホッピングにダイビングにホエールウォッチング…。セブでの研修を決めた時から、何をしようかワクワクする気持ちでガイドブックやネットを調べたが、どうもピンとこないのである。我が家の双子の息子たちは、動物に異常なほど興味をもっており、家中に「世界の危険動物」みたいな名前の本がごろごろしていて、マッコウクジラとシャチが戦ったらどうなるか2人で真剣に語り合っていたこともあった。正直言って私は全くクジラに興味はないのだ。すまない、息子たちよ。というわけで、私は完全に日本での趣味をセブに持ち込むことにした。スーツケースの中はゴルフウェアと山の装備。そしてゴルフバッグを持ち込むという暴挙に出たのであった。

滞在2週間が経ったある日、私はすでに4つあるゴルフコースの3つでプレーを経験していた。そしていつものように、ホテルでエレベータを待っていると、知らず知らずのうちに私の体は無意識にゴルフスイングを繰り返していたようだ。突然、セブではほとんど見かけることのない、スーツをビシッと着たダンディが私に話しかけてきた。どうやらこのホテルの副支配人のようである。「そんなにゴルフが好きなのか？」「はい。もう3つのコースでプレイしたんですよ。」などとやりとりしているとすぐに意気投合した。特に、私が最初に訪れた「Alta Vista Golf Club」はどうだったと聞いてくる。正直に私はこのコースの苦い思い出を語った。プレイフィーがセブでは2番目に高いこと（日本円にして12,000円くらい）。突然の大雨で途中1時間近く中断せざるを得なかったこと。メンバーが優先されるので、私のようなツアリストは午後2時以降でないとラウンドできないことに不満であること。「よし、MJに言っといてやるよ。MJはAlta Vista Golf Clubのオーナーの１人だからさ。」と彼は言う。私が滞在するホテルの名は「MJホテル」。そう、このホテルのオーナーはゴルフクラブのオーナーでもあるということだ。翌日、オーナーのMJと面会する。相当のゴルフ好きらしく、日本のゴルフ事情を聴いてくるので私も一生懸命に説明した。私の熱意が伝わったのかどうかは知らないが、Alta Vistaで特別なディスカウントをしてくれること、メンバーと同じ時間帯にプレイできるように手配することを約束してくれた。人生には、時にとんとん拍子で物事が好転することもあるのだ。

8月6日（火）。この日は、国民の休日で学校は休みだ。決して授業をサボってゴルフをしようという訳ではない。9時にゴルフバッグを抱えてホテルを出ようとすると、偶然、MJと副支配人のHedlichに出会う。感謝の気持ちを伝えると、2人とも嬉しそうにして私を送り出してくれた。

2度目のAlta Vista到着。ちなみにホテルからはタクシーで40分くらい。山の中にある。300ペソなので、650円位か。セブのタクシーは日本人感覚からすると安い。Altaはhighという意味で、Vistaはviewという意味だ。「高いところからいい眺めを見ながらゴルフしてください～」というゆるい名前のコースのわりには、アップダウンのきつい日本ではなかなか見られない難コースである。MJオーナーの紹介状をもっているし、事前に予約もされているそうなので、前回とは違って堂々と受付に向かう。紹介状を手渡し、手短に事情を説明すると、「すぐにプレーできますよ、サー」みたいなことを言われる。前回と全然態度が違うではないか。

スタート前にキャディに挨拶する。セブでは1人のプレイヤーに1人のキャディがつく。ゴルフ場に限ったことではないが、セブでは、店員や従業員がやたらと多い。「そんなにいなくていいでしょ」と思うことが少なくない。私が立ち寄ったショッピングモール内のナイキのお店にも、客数の割にはたくさんのスタッフがいて、その1人は、店内で完全にバスケットの練習に興じていた。次に、一緒にラウンドする2人に挨拶をする。韓国人の50歳くらいの夫婦である。名前はMr. & Mrs. Ha。漢字で「河」と書くらしい。

天候にも恵まれ、この日のラウンドは素晴らしいものになった。Mr. & Mrs. Haも笑顔を絶やさぬ素晴らしい夫婦で、いろいろなことを話した。韓国も温暖化が急速に進んでいるとか、セブにある韓国料理店は本国と比較しても遜色ないとか、マンゴーを食べ飽きてしまったとか、家族の在り方や、日韓経済問題とか。滞在しているホテルが近かったので、最後は1台のタクシーでホテルに向かい、握手して別れた。

私がエレベータの前でゴルフスイングをしている。ゴルフ好きのオーナーから声をかけられる。ゴルフ好きの韓国人とラウンドする。まるで4コマ漫画のような展開となった。ゴルフというスポーツを通じて、素晴らしい人達と出会い、文化について学び、忘れられない経験をすることができた。やっぱりゴルフっていいね。

英語教師　セブ　日々挑戦（p51～74）

幸松　世剛

Mt. マヌンガル登頂。名前はよく知られているが、登った人は少ない。

オスメニアピーク登頂。セブ島最高峰だが、アクセスはしやすい。

マゼランクロス。かの有名なマゼランがキリスト教を布教した。

ジプニーと呼ばれるフィリピンの乗合タクシー。電車のないフィリピンの主要な移動手段である。